

「私の放送人生」第5回
関東民放クラブ 武本宏一氏

音と映像を武器に時代を表現



ラジオ東京入社

私の放送人生は、1961年にラジオ東京（現TBS）に入社したことからスタートした。

当時ラジオ東京は、有楽町日劇の裏にあった、毎日新聞別館ビルに入っていた。

私は毎日、フランク永井のヒット曲『有楽町で逢いましょう』を口ずさみながら出勤、何だかやつと時代の最先端を走り出した気がした。

先ず配属されたのは、運行課という地味なセクション。一日4人程が交代で、ひたすらラジオのオンエアを聴き、何かアナウンスミスはないか、レコードのかけ違いはないかなど、チェックする。単調な毎日だったが、あらゆる

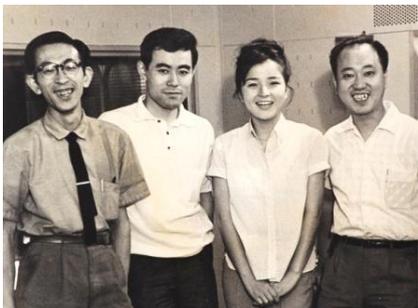
ジャンルの番組、ラジオドラマ、録音構成、歌番組など聴いていたお蔭で、いつの間にかすっかり耳年増。様々なノウハウを得た。

これが後に番組を自分で創り出した時の、大きな財産になった。

翌年、社は社名をTBS東京放送と改め、赤坂の新局舎に移転した。ここでも私はまた一年間を運行課で過ごしたが、3年目には待望の番組制作局へ異動となった。

新局舎4階のラジオ局の机に座っていると、机の間を立川談志さん、湯川れい子さん、毒蝮三太夫さんらが颯爽と歩きまわっている。活気あふれる職場だった。

私は局の中の「歌謡曲班」に編入された。大学時代はクラシックばかり聴いていたので、初めこそへんな気がしたが、やがて次々と現れる新人スター歌手、舟木一夫



倍賞千恵子さんと

西郷輝彦・倍賞千恵子さんらのワンマンディスクジョッキー番組の担当となり、いつの間にかいっばしの歌謡曲ディレクターを自負していた。

その鼻がへし折られたのは、1964年のこと。この年私は、「レコード大賞」審査委員の末席に列せられていた。いよく大賞曲などの選考に入り、大賞は当てたのだが（註・青山和子うたう『愛と死を見つめて』）、さて新人賞が発表になると、仰天した。

都はるみ『アンコ椿は恋の花』。なんとお恥しいことに、私は全くマークしていなかった。

すぐさまレコード室に駆けこんで聴いてみると……、その声量の豊かさ、パンチの利いた歌唱力に私はすっかり打ちのめされた。何でこんな名曲に気がつかなかったのだろう。私は自らの無知を責めた。

放送人たるもの、常に360度目と耳をそば立たせていないと、「三日遅れ」どころか、時代に完全に置いていかれてしまうぞ！と肝に命じた。

寺山修司さんと

本籍は歌謡曲班だが、私は食欲に、様々なジャンルに挑戦した。60年代にメキメキ頭角を現して

いた寺山修司さんとは『東京キッド』というドキュメンタリードラマを作った。



東京キッド取材中の筆者

美空ひばりの戦後のヒット曲『東京キッド』を流しながら東京中の老若男女に「あなたの右のポケットにや何が入っていますか」と聞いてまわる。その答えを切り貼りし、ひばりの曲にモンタージュした。

仕上げてみると高度成長中のニッポンの時代気分が立体的に立ち上ってきた。なるほど、これが寺山マジックなのだ、と実感した。

ヘリコプター交通情報

私は又、毎日ヘリに乗って、東京上空から渋滞の始まりだしたクルマ時代の実況を始めた。アナウンサーは稲川英雄アナ。「只今三軒茶屋上空、246号線は渋谷方面に向かって約1キロ渋滞中です。ラジャー」。流石元海軍パイロット、堂に入ったものだった。



「只今三軒茶屋渋滞」
「ラジャー」

「ヘリコプター交通情報」のはしりだった。彼が見下ろす下界には、平和をむさぼる日本が広がっていた…。

**ラジオ「深夜放送」のさきがけ
—バックインミュージック—**

東京オリンピックも終え、新幹線も走り出した、高度成長真っ只中の1967年。

街は活気づき「深夜族」まで現れ、また次代をになう団塊世代の若者達は、厳しい受験戦争に勝ち抜こうと、深夜まで勉強に励んでいた。

こうした時代を背景に、TBSラジオも、それまで放送休止も多かった深夜帯に新番組を始め、新しいリスナーを開拓しようと決め、私達制作部にそのための企画作成の命令が下った。

私は喜んだ。というのも、ディレクター達は誰もが、ぜひやってみたい企画を持っている。それを

実現できるかも知れない、絶好のチャンスが到来したからだ。ある者は「徹夜でジャズをかけたみたい」と云い、またある者は、「昼間は放送しにくいサブカルチアをあれこれ紹介したい」、と主張する。

議論はケンケンガクガク、なかなか一本の企画にまとまらない。一週間ほどの後、副部長がこう決断した。「武本、君に任せろ。まとめてくれ。」

これは大任だ。しかし折角の指名とあらば、仕方ない。

その晩ホテルの一室にこもって、さて、と、私はウイスキーと鉛筆をなめなめ企画をとりまとめようとしたが、夜が更けても一向にイメージが湧いて来ない。焦った。やっとならば……。ふと私の脳裡に何かがかすめた。

「待てよ、たしかシェークスピアの戯曲の中に、夜現われて恋人たちにはいたずらを仕掛けたり、恋の手ほどきをしたりして、朝になると消えて行く妖精がいたっけ…。そうだ、バックだ。「夏の夜の夢」に出てくる妖精バック。」

今私が考えているこの企画は、まさに「ラジオのバック」そのものではないか!!ピンとひらめいた後は、もう一瀉千里…。明け方

までに一週間分の内容を網羅して、イメージキャラクターを妖精パックとする企画書「パック」を書き上げた。



スタート時の出演者たち



数日ならずして、幸いこの企画には日産自動車の提供が決定、タイトルは『日産パックインミュージック』となつて、1967年7月から他局に先きがけ、(月)の毎晩深夜0時半から4時間半のワイド生放送が実現した。

因みにLFニッポン放送では、これより3ヶ月後に「オールナイトニッポン」を開始。またQR文化放送も「セイ・ヤング」でこれに続いた。深夜放送の一大ブームの火つけ役は、小さな私の頭脳からとび出した『パック』だったのだ。

私自身は、明大を卒業したばかりのなべおさみさんを起用して一曜日を担当したが、何と云つても、野沢那智・白石冬美さんのいわゆ

るナツちゃんチャコちゃんコンビの木曜パックの大人気が、この番組の聴取者を釘づけにした。この番組は15年間も続き、終了が発表されると翌日から、赤坂周辺で終了反対のプラカードを掲げたデモ隊が氣勢をあげる始末だった。企画者冥利につきるものがある。そして、この『パック・インミュージック』こそ、私がTBSラジオに遺した最も思い入れの深い遺産である；

さらばTBS！

テレビマンユニオンに参加

1970年、それは私の以後の放送人生にとって、一大転機となつた年である。

前年暮れのある日、私は尊敬するラジオの先輩、当時テレビ局の萩元晴彦さんから呼び出しを受けた。

一体何だろう、と急いで本館2階ロビー（いわゆる2ロビ）に下りてみると、そこに萩元氏と、前年彼と共に新しいテレビ論を展開した本『お前はただの現在に過ぎない』を著した、村木良彦さんもいた。「実は相談があつてね！」萩元さんは話し始めた。

いまTBSは、例の成田報道事件の余波で、TBS斗争も始まつていて混沌たる状況にある。この

逼迫した状況を抜け出すために、実はテレビ局の社員10数名で集団退社して、日本で初めての独立した番組制作会社を作ろうと思う。ついでには、ラジオ局からも人材が欲しい。どうだ、一緒に辞める気はないか。

これはまさに私にとって、晴天の霹靂だった。

ラジオ局に10年近くもいて、そろそろテレビ局に移りたいな、と思つていたところだったのだ。私の未来が一瞬、パツと拡がった気がして私は即答した。

「分かりました。参加します。」



テレビマンユニオン 設立前夜の集会

翌1970年の2月、退職社員13人を含む総勢25人テレビマンユニオンは、たくましい産声をあげた。私の第二の放送人生の、それは幕開けであつた。

ラジオマン、テレビマンとなる

いまこゝに、古く薄っぺらい一冊の放送台本がある。



『何ごとか始まったべし』台本

題して、『TVジョッキー』。TBSテレビの深夜帯にTBSから与えられた枠を用いての、(月)金の、深夜11時50分から45分間の、ユニオン初の制作番組だ。

実はこれこそ、私が深夜ラジオ番組として実現させた『パックインミュージック』のテレビ版であつた。世間の耳目を集めた新鋭制作集団の旗上げ番組。とにかく従来の殻を破る、角度のある番組を、との思いが、この「テレビ深夜の解放区」をうたい文句とする番組につながつたのだ。

第一回のサブタイトルは「何ごとか始まったべし」。当時の意気が表れている。

但しこの番組、一年後にはタイトルも変り、視聴率も取れないまま、結局2年間で打ち切りとなつた。何でも理念ばかりが先立つ、若い集団がテレビマンユニオン……そんなさゝやきが聞えるようだった。この窮状を抜け出す第一歩とな

ったのは、1970年10月、国鉄の意欲的キャンペーン「ディスカバージャパン」とがっちり組んだ旅番組『遠くへ行きたい』（日本テレビ系）の放送開始である。

それまでのテレビ旅番組と云えば、先ずは各地の風景・風物をフィルムに収めて、それに美文調のナレーションを加える、というのが大半だった。没個性であった。

ところがこの『遠くへ行きたい』は、永六輔、五木寛之、立木義浩さんらの異才が、それぞれ行きたい場所を訪れ、会いたい人に会い、それをそのままドキュメントにする、という「一人称の旅番組」であった。現在ではごく当たり前になったこの旅番組形式は、当時まことに斬新で、ジュリー藤尾の歌うテーマ曲のヒットとも相まって大きな話題となり、今も毎週日曜日朝に放送が続けられている。

私も、当時雑誌「平凡パンチ」の表紙を毎号描いていた大橋歩さんに登場してもらい、松本市の草木染を訪ねて、一本制作した。私はいつの間にか、ラジオマンからテレビマンになっていた。

『クイズジャンボ』〜日本初の

海外取材のクイズ番組

さて1971年春に、TBSから秋以降の日曜夜30分枠の企画

募集があり、私達は興奮した。

というのも、テレビマンユニオンはそれまで、いわゆるゴールデンアワーの番組は一本も制作していなかったのだ。

チャンス到来……。社内では企画会議が開かれ、何本かの企画を提出した。

結果は、何と、この私が企画した海外取材番組、仮称『ワールドクイズ』が採用された。

嬉しかった。放送時間は毎週土曜日夜7時から……。つまり、あの大人気番組『8時だよ！全員集合』の1時間前という、ゴールデン中のゴールデンアワーである。

私はこの頃高まつてきた、海外旅行熱に目をつけていた。

TBSの『兼高かおる世界の旅』が火をつけたとも云える、海外ブーム。これを題材に、必ずや視聴率の取れる番組が出来る筈だ……



前田武彦さんと兼高かおるさん

私の企画は、こうだ。取材班が海外に渡り、外国に住むその土地の人々から、直接カメラに向って、

その土地にまつわるクイズを原語で出題してもらう。この取材フィルムを日本に持ち帰って、スタジオに集まったゲスト解答者たちに見せ（音声はアテレコ）、クイズの解答を競ってもらおう、というものだ。

番組が決ると、私はすぐ、ブレインに兼高かおるさんと、あの大袈裟に「ヒョーショージョー」と叫んで人気となったミスタージョーンズ氏（パンナム航空極東支配人）をお願いし、クイズのアイデアを沢山いただいた。そして、私が一番に海外クイズ取材に当たることとなり、私達スタッフは早速フランスを訪れた。

先ずは花の都パリ。試しに一間、誰かから出題してもらおうと、セーヌ川のほとりを散歩中の中年のムッシュに頼んでみた。

「すみませんが、何でも結構ですから、この川に因んだクイズを出してくれませんか？」

「ウィワイ、と快諾してくれたムッシュは、カメラに向かってフランス語でこうしゃべった。

「いま流れているこの川の名前は、何でしょう……、セーヌ川」

「おいおい、答えはい〜んですよ……。ともかく、こんなエピソード

を積み重ねながら、私達は英国や北欧などをまわり、取材フィルムを本国に送り続けた。

帰国してみると、この番組には『クイズジャンボ』というタイトルがつけられており、総合司会にはマエタケこと前田武彦さんが起用されていた。

第一回のスタジオ収録には、左幸子さんらの豪華解答者が勢揃い、今野勉演出によって、実に楽しいクイズ番組となった。

のちには視聴率30パーセントもマークした。

テレビマンユニオンには、その後、今なお続く海外取材クイズ番組『世界ふしぎ発見』を制作、放送中だが、私の『クイズジャンボ』こそその大河の源流だったと、密かに自負している。

クロスメディア・ディレクターへの転進

ところで私は突然、1973年2月に、ユニオン創立メンバーの一人、私淑する宝官正章さんと行を共にして、ユニオンの別会社を立上げ、そちらへ移籍した。

ユニオンも出資してくれたこの新しい会社はあくまでテレビCM制作を本業として、社名も「テレビマンユニオンコミュニケーションズ」略してTUCと称した。（のち、テ

レコムジャパン）

積極的に外部の一流CMプロデューサーを集めて力をつけ、数年ならずして、キリンビールなど、広告のACC賞を10本も受賞するまでになった。

中でも1984年。珍妙なスタイルのエリマキトカゲが疾走する、三菱自動車のCMは、大人気となり、この年のACCグランプリを受賞した。

実はこの私自身も、世に物議をかもし出す、あるCMソングを制作するのだが、これは後に詳しく述べよう。



エリマキトカゲで話題

FMラジオに新風を

日本で初の民放FMラジオ、FM東京が開局したのは、1970年。ちょうど私がTBSを退社したその年だった。

局にはまだラジオ番組制作者が育っておらず、この私にも声がか

かり、私は早朝の生のワイド番組や深夜のトーク番組などのプロデューサーや演出を担当した。

開局以来、FM東京は「モアミュージック・レストーク」をモットーとし、朝から晩まで大半が、高音質の音楽番組を流していた。

私はとにかく個性ある番組を作ることにした。

『音の本棚』これは、1976年、民放FMラジオ初の、ステレオ・ラジオドラマシリーズだ。局から、(月)金の夜25分枠を提示されたので、私は考えた。

先ず、原作は、O・ヘンリーや星新一などのショートショート、あるいは短編サスペンス小説を用いよう。

これを脚色・ドラマ化し、これに時流ののっている内外の音楽をミックスさせ、新しいジャンルの「ドラマジョッキー」としよう、と考えた。

ナレーターには、『刑事コロンボ』で好評だった小池朝雄さんを起用した。

さて、難題発生。それはラジオドラマには欠かせぬ、効果音のことで。たとえば、ギヤングがクルマを走らせながら右角から現われ、こちらに向かって銃を乱射しながら左方へ走り去っていく…。そんな

場面のステレオ効果音づくりだ。私たちは局のミキサーさんと共に試行錯誤を繰り返し、音づくりのための徹夜が当り前だった。

努力の甲斐があつて、サントリ提供のこのドラマには多くのヘビリスナーがつき、実は放送後50年近くもたった今でも、ユーチューブには当時の録音が投稿されており、当時をありありと思い出すことが出来る。

『五木寛之・夜のペントハウス』

1973年、大手広告代理店で文藝春秋担当だったOさんの紹介もありFM東京で、直木賞作家五木寛之さんの出演する対談番組をつくることになった。

収録の場所は、芝のプリンスホテルのデラックスルーム。第一回ゲストは、パリから帰国中の女優、岸恵子さんだった。楽しい話題が交されて、対談の収録は無事、終了した。

さて、これを番組にするに当たって、五木さんがこんなアイデアを云い出した。

「ヒットするラジオ番組には、必ずオープニングテーマに『効果音』が使われている。たとえばラジオ関東の『ポートジョッキー』は、先ずボートと船の汽笛から始まるし、FM東京の

『ジェットストリーム』は、飛立つジェット機の轟音にテーマ曲がかぶってくる。

では、こちらのオープニングも音で勝負しようではないか。あちらに対抗してクルマのエンジン音で始めたらどうだろうー。

一瞬私は、マイカーのブルーバードの音を録ろうかと考えたが、五木さんはすぐこう云った。

「いまホテルの地下に、ぼくのクルマを置いてある。そのエンジン音を録ってみてくれませんか」。

私はすぐ録音マンと一緒に、地下の駐車場に行ってみて、驚いた。なんと、あの映画『007』で大暴れる名車アストンマーチンが、デンと座っている。

早速借りてきたキーでドアを開け、エンジンを起動させてみた。すると、ズシューと腹に伝わる、ゴージャスなエンジン音。「これだ！」とすぐに収録し、のちスタジオに入って、これも五木さんの指示した曲、マル・ウオールドロンの『レフト・アローン』をかぶせてみると、何ともアンニュイで洒落な番組オープニングが完成した。

後に知ったところによると、氏は若い頃、ラジオCMやラジオ番組を作ったキャリアの持ち主なの

であった。

この令和3年、五木氏は新しく『回想のすすめ』という本を出している。

私もこうした心豊かな回想を嘯みしめているところだ。

テレビ番組制作を再開

TUCの設立直後こそ、テレビマンユニオンに遠慮もあつて、テレビ番組制作は控えていたが、私自身にはやってみたいテレビ企画がいくつもあり、遂にテレビCMやFM番組に次いで、テレビ番組制作に乗り出した。

テレビ東京では、当時の海外技術協力事業団（JICA）の活動を描くべく、『途上国の明日』シリーズを制作した。（1974年）

また朝日放送系では、『プラハの春国際音楽祭スペシャル』などを制作した。（1982年）



プラハで

また、1940年開催予定だつ

たが、戦さの足音のため実現しなかった東京の五輪大会を描いた『今日蘇る幻の東京オリンピック』（テレビ朝日系、河内紀・演出）は、1988年度の第26回ギャラクシー大賞を受賞した。

こうした幾多の番組制作の中で、私が私の信念である「企画こそ力なり」を実感した、メディアをクロスしてのソフト制作がある。それが『地球は音楽だ（1977年）』『テレビ朝日系放送』

ある日、知人の広告代理店のI氏が、「実は今、クライアントに持っている日立マクセル、という会社が、新製品の高音質カセットテープを発売する。同社は、これに相応しいキャッチコピーとテレビ展開を考えているのだが、何かいいアイデアはないだろうか」と云う。咄嗟に私の脳裏にひらめいたのは、この頃やつと使用し始められた、小型VTRシステム、ENGを駆使する海外取材番組だ。

世界中の音楽シーンを高音質で収録して、これに日立マクセルのキャッチコピーをつけてみてはどうだろうか、と私は提案した。

「で、どんなキャッチコピーにする？」、私は即座に答えた。「地球は音楽だ——日立マクセル」。「うん、それだつ」と一言残して

彼は一目散に帰って行った。

結果は大成功。『地球は音楽だ』をタイトルとするテレビ・ドキュメンタリーシリーズの提供が決定（テレビ朝日系）。更に同じタイトルで、FMラジオ番組も放送する（FM東京）。勿論、これをキャッチコピーとしたテレビCMも制作する——というまさにメディアをクロスする、一大プロジェクトが実現した。

総合プロデューサーである私自身もモロッコに赴き、「コーランは音楽なりや？」をテーマに、一本演出を担当した。

地球とは何か。それは音楽の惑星である。今でも私はこう確信している。

『世界の車窓から』

—私のテレビ遺産

私はスポンサーの富士通と縁が深い。かねてからテレビ東京で、タモリ氏が司会する『コンピュータナイト』を制作放送したが、のち大阪の朝日放送では、スタジオに電話で寄せられる視聴者の様々な答を、コンピュータが忽ち集計する、というアンケート番組『ザ・コンピニオン』（毎週日曜 日朝8時）という生ワイド番組（司会、関口宏）も同社提供で制作・放送した。

1987年のある日、その富士通が、毎晩シリーズで放送する5分間のレギュラー番組を提供したい意向だ、と聞き、早速3案ほど提出した。

その中で決定したのが、世界の鉄道に乗り、その乗客の様子や車外に展開する風景、通過する街々などを紹介する、『世界の車窓から』であった。（テレビ朝日）

企画に当って私は、鉄道評論家としても有名な作家、宮脇俊三さんにお会いし、先生、この企画は10年くらい保ちますか？ と伺うと先生笑つて、「いやあ君、50年はいけるよ」とのこと。本当かな、とその時は思った。



『世界の車窓から』

しかし、この番組は、私の後輩のスタッフの力で放送30年間に超え今なお放送が続けられ、鉄道番組の元祖として、放送2万回にも達しようとしている。私がテレビマンとして最後に番

組を立ち上げたのが、この『世界の車窓から』だが、社名をテレコム・スタッフとした私の故郷は、今やNHKをはじめ多くの局の番組を制作する、日本有数のプロダクションになっている。

山本直純さんとCM制作

火の用心のうた

ここまで累々、私の放送人生を語ってきたが、実はいまパソコンで「武本宏一」と検索すると、真っ先に出てくるのが、CMソング『火の用心のうた』作詞者としてである。これには些かくすぐったい。

1976年のある真夜中。TBSの頃から懇意にしていた、作曲家兼指揮者の山本直純さんから、突然電話がかかってきた。あの「大きいことはいゝことだ」の森永チョコレートCMで大人気となった、ヒゲの指揮者だ。

「実はね…、日本船舶振興会の笹川会長から、CMソングを頼まれたんだよ。作曲は俺がするから、武本ちゃん、作詞をしてくれないか」聞けば、オーケストラはどこも貧乏で、笹川さんからは大いに援助を受けていて断れない、というのだ。「で、どんなCMソングを？」ナオズミさんの答えはこうだった。

「その振興会、競艇の上りの中から、全国の消防署や少年団に支援金を出している。だからCMのテーマは、「火の用心」にしたらいゝのじゃないか。そのCMソングでテレビCMも作る。(用) (借用)に、歌詞は7番まで頼むよ。明日



山本直純さんと

の朝までいね。」電話は切られてしまった。仕方がない私は「戸締り用心・火の用心」で始まる詞を、月曜日から日曜分まで大急ぎで書き上げた。

「ゲンゲン元気な月曜日」とか、「肝心カナメの火曜日だ」とか、曜日語呂合わせはした。

さて翌朝、ナオズミさんに届けると、午後彼は早速笹川さんに会って、私の詞を見せた。

笹川さん、読んでいる内に…、「水はいのちのお母さん、スイスイスイ水曜日、か。これはいゝ、これに決めた！」。一瞬でCMソング「火の用心の

うた」が決まり、同時にこの歌を使ったテレビCM制作も決まった。高見山やナオズミさんらが、火の用心のまといを持って街を練り歩くCM。大きな話題を呼んだ。平成に入って、私の『火の用心のうた』は、マンガ『野だめカンタービレ』で取り上げられたり、是枝裕和監督の映画『歩いてても歩いても』の中で、樹木希林さんが昭和の思い出話にしてくれたりした。

人生はブーメラン

古巣TBSに戻る

音と映像を武器に時代を表現してきた私の放送人生最後の10年間は、なんと古巣TBSのラジオ番組制作子会社の代表取締役として、TBSに恩返しをすることになった。まるでブーメランだ。若き日、TBSラジオを出奔した私は、運命のいたずらか、その約20年後の1989年、気がつけば再び、赤坂TBS局舎内にオフィスを構える子会社の社長室に座っている。夢のようだ。

ここで私は、現在もオンエア中の朝いちの番組『生島ヒロシのお早う一直線！』はじめ、『歌のない歌謡曲』など、幾多のTBSラジオ番組を社員たちと制作した。53歳から63歳までのこの10年

間は、瞬く間に過ぎて行き、2000年3月いっぱいまで、私はその放送人生の幕を自ら下ろした。しかし、その後に、私の放送人生にはまだ『番外編』が待っていた。この民放クラブに入会し、多くの昔の「戦友」たちと、このコロナ時代の中でも楽しい時間、心豊かな時間を一緒に送っている。感謝の気持ちでいっぱいである。

武本宏一氏の放送人生

1961年	東京大学文学部卒業 ラジオ東京（現TBS）入社。
1970年	ラジオ番組制作 テレビマンユニオン 設立に参加。
1973年	テレビ番組制作 後のテレコムジャパ ングループに移籍。 テレビ番組のみならず、 テレビCM、AM・FMラジオ番組、 PCM番組、レーザー ディスクなどメディア アをクロスして、 幾多の作品を発表。 6月から2014年 5月まで日本・関東 民放クラブ理事長 現在同会相談役 日本エッセイストク ラブ会員
2010年	
2021年	